

田和正孝編

『石干見 最古の漁法』

佐野 静代

「石干見」とは、沿岸部に馬蹄形や方形に石垣を築き、潮汐によって石垣内に封じ込められた魚類を捕獲する漁法である。日本ではかつて有明海周辺と南西諸島に多くみられ、東南アジアから南太平洋地域まで広く分布する漁法であったが、現在ではすっかり廃れつつある。近年、漁村の民俗文化や文化的景観として、あるいは「コモنزの海」の観点から石干見の価値を見直そうとする動きが顕著になってきたが、このようなままなざしが寄せられる以前から沿岸漁業研究の一環として石干見に注目してきた編者が、日本・韓国・台湾の研究者達に呼びかけてまとめられたのが本書である。

本書は「もの」と人間の文化史」シリーズの一冊として刊行されたが、各章は執筆者が学術誌に発表した論文を加筆修正あるいは日本語訳したものを主としており、ここ一〇年ほどの石干見研究を集大成した本格的な論文集となっている。総勢7名の執筆者により一〇章立てで構成されており、第一章から第三章までを総論として石干見の分布・構造・所有について概観したのち、第四章

以降は各論として、沖縄・奄美・五島列島・韓国・台湾の石干見研究の成果が提示されている。以下、各章の内容について述べる。

まず、「はじめに―東アジアの石干見文化」において、日本と韓国・台湾における石干見の研究史とともに、本書の目的が記される。一九六〇年代の海洋人類学者・西村朝日太郎による研究を嚆矢として、途中一〇年間の空白期間を経たのち、九〇年代以降は日本・韓国・台湾で石干見研究の活性化がみられる。このような東アジア各地の石干見研究の最前線を示すことによって、今後の研究方法の精緻化や地域間の比較研究を促進することが、本書刊行の意図とされる。

「第一章 石干見の分布」(田和正孝)では、東アジア(日本・韓国・台湾)、東南アジア(フィリピン・インドネシア)、太平洋(メラネシア・ミクロネシア・ポリネシア)、その他の地域(フランスなど)における石干見の分布・名称等について概観する。石干見は潮汐作用が顕著な沿岸部に設けられるため、その立地場所は干潟とサンゴ礁の二つに分類される。日本では有明海沿岸の干潟や、南西諸島のサンゴ礁リーフがこれに相当する。

石干見の形態は各地で多様であるが、「第二章 石干見の形態と構造」(田和)では、その分類について、発展系列的視点から西村説の批判的検討が行われている。潮差と石材の比重・石積みの高さの関係なども検討され、各地の自然環境に応じた構造の詳細が議論される。

「第三章 石干見の所有と利益」(田和)では、個人所有・共同所有それぞれの形態をとる各地の石干見について解説がなされ

る。地主等に世襲される事例に加え、個人所有であつても他者の入漁を妨げない事例もみられる。共同所有の石干見に関しては、多辺田が報告した石垣島の「一族による所持」の事例が著名であるが、本章ではさらに台湾本島・澎湖列島・韓国済州島にみられる株形式の所有形態が紹介される。

続く四章以下には、各論としてそれぞれのフィールドにおける石干見の詳細な研究成果が収録されている。特に日本の石干見の実態を克明に描き出した第四章と第五章は、本書の中核を成す部分ともいえよう。「第四章 沖縄・小浜島の石干見」（矢野敬生・中村敬）は、一九七二年当時に西村の指揮の下で実施された貴重な調査の成果である。この時期まで残存していた二七の垣（石干見の方名）の位置・名称・所有者・来歴についての聞き取りに加え、垣の実測や捕獲魚種・漁期・経済的価値の分析まで、その調査項目は多岐に及んでいる。特に、所有をめぐる法的関係や、構築の契機に関わる伝承、さらに石干見と宗教的慣行との関連を示したことなど、小浜島の石干見に関する知見が網羅された論文といえる。

「第五章 奄美諸島および五島列島の石干見漁撈」（水野紀一）は、同じく西村門下において実施された調査であり、特にこれまで研究の空白地帯となっていた五島列島の石干見の実態をはじめて明らかにした貴重な成果である。石干見の分布・形状の実測、漁獲方法・魚種・漁期の記録に加え、本章の最大の特徴は、石干見の所有関係に関する克明な調査がなされていることである。所有者のみならずその家格（旧士族・本家筋など）までが分析されており、個人所有の石干見と、村落総有で用益される石干見と

の対比が鮮やかに取り出されている。なかでも五島列島の村落総有の石干見が神社祭祀と結びついていた事実は興味深い。

六章以下では、広く東アジアにおける石干見の実態解明の視点から、韓国・台湾における研究成果が提示されている。「第六章 韓国の石干見漁業」（李相高・許成念）は、韓国の石干見に関する学術論文を訳出したものである。韓国の南・西海岸及び済州島沿岸に広く分布する石干見の構造や操業形態について詳細に調査されており、この論文によって韓国の石干見の実態がはじめて明らかにされた。

七章から九章までの三論文は、台湾海峡に位置する澎湖列島をフィールドとしている。「第七章 澎湖列島における石滬の研究」（陳憲明）では、サンゴ礁の海に面した3つの漁村における石滬（石干見）の形態・構造と、築造や所有をめぐる社会的関係を、聞き取りと漁業活動の直接観察から調査している。石滬での漁業活動とその利用、特に地縁や血縁に基づく所有組織のあり方が具体的に記されており、台湾の石滬の操業実態を解明した意義は大きい。

「第八章 澎湖列島における石干見漁業史」（田和）では、同じ澎湖列島の石干見を対象としつつも、日本の統治時代の漁業調査記録や公文書などの史料分析によって、澎湖列島の石干見の位置づけを近・現代漁業史的な視点から解明している。従来、聞き取りを主な調査手法としていた石干見研究に対して、歴史資料の丹念な掘り起こしに基づく研究アプローチは、聞き取りの時間選及性の限界を補完するものとして高く評価されよう。また本論文では同時に、石干見に対して近年付与されつつある新たな意味、

すなわち文化遺産あるいは観光資源としての価値づけについても考察しており、現在の各地での石干見再評価の動向を読み解く上で、重要な視角を提起している。

「第九章 澎湖列島吉貝嶼における石滬の漁場利用」（田和）では、吉貝嶼という一つの島における石滬利用を事例に、漁場利用の「生態学的側面」が論じられる。共同所有に基づく吉貝嶼の石滬では、その権利者がくじ引きによって毎日交替利用することに特徴があり、かつ個人は複数の石滬の所有権（株）を有するものが通例となっている。著者はそのくじ順と潮時の巡り合わせ、さらに株数の異なる石滬間における漁獲量の組み合わせ関係を分析し、このような利用方式が各漁業者間の漁獲量の平準化機能を果たしていた可能性を提起する。

最後に、「第十章 東アジアの石干見研究」では、各章での成果のまとめと今後の課題が示される。東アジアの石干見文化圏について、東シナ海を取り巻くその分布の詳細が成果として分布図にまとめられるが、一方、まだ報告例のない中国中南部での研究の必要性が訴えられる。続いて、石干見の技術、所有と利用、漁獲物の分配についての総括がなされ、最後に石干見の文化財としての保護と観光資源としての活用の可能性が展望されている。

本書の最大の特徴は、従来とすれば個別的分析に終始しがちであった石干見研究を、東アジアを視野に入れた比較研究へと展開させる道筋を示したことであろう。これまでの研究では、物質文化の側面から個々の石干見の実態調査とその記録化に重心が置かれてきたが、今後、広域的な文化圏としての問題や、あるいは

石干見の意味論自体まで、議論が深まっていくことを確信させる内容となっている。

そもそも石干見の研究史は、八〇年代半ば以降、漁具としての有用性の衰退とともにいったん途絶えていたが、それが九〇年代の多辺田政弘のコモンズ論^①をきっかけに再度活性化した事実を重視したい。つまり石干見研究は、石干見という物質文化を越えて、コモンズ論など広い枠組みに据え直されることによって息を吹き返した経緯があり、その意味では、石干見研究は単なる漁具研究には収まりきらない様々な可能性を持つ分野といえよう。本書はこの素材としての石干見の魅力と研究の可能性を余すところなく伝えており、石干見研究の重要性を広く喚起することに成功している。また、変容しつつある各地の沿岸漁業の実態を、地域に即して鮮やかに取り出して見せた点で、もちろん漁業史研究としても高く評価されよう。

このように重厚な内容を持つ本書であるが、細かな点で気になったことを二・三あげておきたい。一つは、「漁具利用の生態学的な研究」（vi頁）などのように、本書で用いられる「生態学」の語の意味である。これはおそらく、「生態人類学」の意と推測されるが、「魚の生態」に比べて、「石干見利用の生態」という表現は、初めて眼にする読者にとってはややとまどいのあるものかもしれない。人類学系の研究者間では周知の概念であろうが、本書を手にする一般読者のために、その研究アプローチの説明がもう少しあっても良いように感じられた。

もう一点は、第十章で結論として提示された分布図（図一〇一）についてである。この図では、九州での石干見分布は有明

海・熊本など西部海岸域のみとなっているが、本書でも引用されているように小川博が福岡県や山口県にも石干見のあったことを指摘しており、日本での分布域はさらに東に広がっていた可能性が高い。同様に、沖縄についても、本図では沖縄本島の南半分が分布域となっているが、名護市や伊江島・伊平屋島でも石干見の存在が報告されている^②。時代を遡れば、石干見の分布はさらに広域であった可能性があり、この点、まだ報告事例のない中国南部、東シナ海の東部域での状況と合わせて、今後の調査と全容の解明が待ち遠しいところである。

石干見について東アジア規模で論じるのは本書が初めてであり、地域間の比較研究の試みは、むしろこれから深化していくであろう。そこで、今後の研究の進展に向けていくつかの提言も可能であると考えるので、以下思いつくままに述べてみたい。

第一章・第二章での説明のように、石干見の分布は沿岸域の地形と深い関わりを持っている。石干見が立地するのは、干潟とサング礁地帯とされているが、各々の地形と石干見の構造・所有形態との対応関係の、より詳細な分析が必要となるであろう。例えば、サング礁地形と一口にいっても、幅1kmにも及ぶ発達したリーフを備えた石垣島と比べ、サング礁の北限に近い奄美大島では、礁池の規模や干瀬の発達具合は大きく異なっている。澎湖列島のサング礁も、おそらくこれらとはまた異なる状況を示している。このようなサング礁地形そのものの多様性が、石干見の構築や運営方法に影響している可能性も考えられるのではないか。今後の各地の比較検討によって、新たな知見が浮かび上がっていく

ことであろう。

次に、第八章で論じられている「石干見に付与される新たな意味」については、今後石干見研究を進める上で、非常に重要な論点であると考ええる。今日、各地で顕著になっている「伝統文化の再発見」と、その「文化資源化」という問題に結びつけて考察することも可能であろう。第八章でも、台湾におけるナシヨナル・アイデンティティ、郷土意識の高揚という政策の下で、石干見が文化遺産、さらに観光資源として新たな価値を与えられていくプロセスが浮き彫りにされている。これに加えて、第三番目の価値として近年日本でみられる傾向は、環境教育の教材としての石干見の意味づけである。小・中学校の「総合学習」において、海の環境を学ぶための教材として見直され、あるいはエコツーリズムの一環として石干見体験が注目されつつある。

重要なことは、それらが多くの場合、石干見の「復原」という手続きを伴っていることであろう。大分県宇佐市など各地で、行政・地域の連携のもとに石干見の復原・再生が進められつつあるが^③、復原された石干見は、もはや漁具の色彩は薄れ、体験学習・海を楽しむためのツールとして新たな役割を担っている。また、その復原のあり方自体についても、かつての石干見をその場所に復原するものや、あるいは別の場所に新しい石干見をつくり出すものなど、地域ごとに様々な事情がある。復原すべき伝統文化とはどのようなものか、その「真正性」に関する議論も今後の論点の一つとなるのかもしれない。

以上のように、石干見はじめて従来顧みられることの少なかった在地の民俗文化も、今日ではその文化財的価値が認められ、地域

おこしの核として再評価が進みつつある。このような趨勢にあつて評者がいつも痛感するのは、そもそも復原・再生のためには、かつて存在した石干見が地域ごとにとどのような姿をしており、どうやって長年維持されてきたのか、その実態を知ることが不可欠だという点である。本著は、石干見の消滅に危機感をつのらせ、その記憶が失われる直前に、詳細なフィールドワークによつてかつての姿を掘り起こしたきわめて貴重な記録である。各執筆者の先見の明とともに、その丹念な検証作業に敬意を表したい。これらの作業によつて石干見研究の基盤が確立されたのみならず、地域ごとの石干見保存の動きに資するところも大きいはずである。

本書の時宜を得た刊行を喜びたい。

- ① 多辺田政弘「コモンスの経済学」学陽書房、一九九〇、同「海の自給畑・石干見——農民にとつての海」(中村尚司・鶴見良行編「コモンスの海」学陽書房、一九九五)七—一四四頁。
- ② 武田淳「イノー(礁池)の採捕経済——サンゴ礁海域における伝統漁法の多様性」(九学会連合地域文化の均質化編集委員会編「地域文化の均質化」平凡社、一九九四)五一—六八頁。
- ③ 「石ひび」の再生とともに海とのつながりも復活、現代農業八月増刊、二〇〇六、二二—三三頁。

(A5判 三三三頁 二〇〇七年二月)

法政大学出版会 税別三五〇〇円)

(滋賀大学環境総合研究センター准教授)